

Management Club Report

Jun.2005/Vol.30

Monthly Opinion よき時代をもう一度

昔は良かった

昔は、歯科医師にとって良い時代だったようです。「医師」という、一般の人間にはない技術によって人を救い、助けることで人から尊敬され、比較的裕福な生活が保障される職業。その中でも歯科医師は、外科医と同じように専門領域の技を磨くスペシャリストとして、その高い技術は大変尊ばれたものでした。

それはまた国民それぞれにとっても良き時代でありました。世の中全体がまだ貧しかった頃ですが、その貧しさをさして苦にも思わず、それぞれの分の中でゆったりと暮らす風情があった頃です。

通勤距離も比較的短く、サラリーマンは夕方6時過ぎには帰宅し、まだ日の高い夏の夕暮れ時には庭木の手入れをしたり、子供とキャッチボールをしたり、縁台で将棋をさしたりといった余裕がありました。幼い頃の遠い思い出の中に浮かんでくるなんとも穏やかで優しさに溢れた風景です。

毎晩深夜に帰宅する父親、塾から帰って一人で食事をする中学受験の兄、母親と2人でテレビを観ながら食事をする弟、そのような光景とは全く無縁の世界がそこにはありました。

多くの家庭では6時から8時にかけての時間帯が一家団樂の夕食時でした。近所の空き地や道端で遊んでいた子供たちは、母親の夕飯を告げる声に二人三人と遊びから抜けて家に帰って行きます。良き時代とはそのような牧歌的な時代だったのです。

単純な「偉さ」に対する敬意が存在した時代

この時代は「偉い」という概念が極めて単純な意味で生活の中に溶け込んでいました。父親は存在感そのものが偉く、学校の先生もまたそれだけで偉い存在でした。勉強のできる子供は単純に偉く、ごく自然に学級委員に選ばれました。運動のできる子供も同様で、徒競争やリレーで一等になるともらえた、「賞」とゴム印の押されたノートを沢山もっていることが自慢で、それだけで偉そうに振舞ったものです。当時の長嶋、王といった野球選手や、大鵬、柏戸といった横綱は運動神経の頂点に君臨する「偉い人」で、入れ替わり少年雑誌の表紙を飾ったものでした。

少年漫画や映画の筋立てもほとんどが「勧善懲悪」で、悪漢をやっつける正義の味方はとても「偉い」存在でした。鞍馬天狗や怪傑黒頭巾が、悪人に捕らえられた人たちを救出に向かい、危機一髪のところ登壇するクライマックス